

第34回日本プラセンタ医学会大会開催にあたって

氷河の流れのように プラセンタが明日への確かな「力」となるために

大会実行委員長 石束 麻里子
いしつか脳神経クリニック 漢方内科

第34回日本プラセンタ医学会大会の実行委員長を拝命いたしました、石束麻里子と申します。

今大会のメインテーマとして、福岡が世界に誇る中村哲先生のお言葉を拝借いたしました。(以下、引用文)

..我々の歩みが人々と共にある「氷河の流れ」であることを、あえて願うものである。その歩みは静止しているかの如くのろいが、満身に冰雪を蓄え固めて、巨大な山々を確実に削り降ろしてゆく膨大なエネルギーの塊である。我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち砕き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている。



プラセンタ治療は、中国700年代「本草拾遺」の記載が最古と考えられており、修治したヒト胎盤は「紫河車」という生薬名で、丸薬や煎じ薬として服用されてきました。その後1930年代の旧ソビエト連邦、眼科医フィラトフ博士が「組織療法」を開発。冷蔵保存した健康な臓器(胎盤、牛の脳下垂体、副腎、甲状腺など)を皮下に埋め込む研究が進み、最も治療効果の高い胎盤が移植されるようになりました。これが胎盤埋没療法であり、現在のプラセンタ注射製剤の源です。胎盤埋没療法は、日本でも1950年代に多様な疾患に効果があることが確認され、より簡便で安全にできる方法として、ヒト胎盤抽出エキスからなる注射液「メルスモン」と「ラエンネック」が日本で開発されました。共に半世紀以上に渡り、保険適用を承認されているという事実をまずは知っていただきたいです(注)。

当学会は2007年に発足し、2013年任意団体から一般財団法人「日本胎盤臨床医学会」へ、さらに2023年「日本プラセンタ医学会」へと名称変更いたしました。プラセンタの作用機序を、基礎研究および臨床研究などの「学術」を柱として解明する姿勢を継続し培ってきたことで、“プラセンタ”という名称を医学的に扱ってもよい段階に來たと判断したためです。学術大会にはこれまでに海外7カ国からのご参加があり、4カ国からの招待講演依頼を受けて参りました。このような国際交流と、国内外含めた多数の論文報告が、その確実な効果を実証しており、日本が誇るべき治療の一つと言っても過言ではないと感じております。

今大会では、「招待講演」にプラセンタの薬効としても鍵となる「睡眠」と「抗加齢」について、最新トピックスをご教授いただきます。また、分科会は現在、保険診療、ウェルエイジング、美容、東洋医学、歯科などの9部門がございしますが、その中の6部門から症例報告があり、即実践型の臨床応用を学んでいただきます。

最後に、中村哲先生のこれまでの偉業と現在進行中の活動について、長年傍で支え続けた方々のお話を伺うとともに、私たちが時折立ち止まって考える「医のころとは何か」という根源的な問いに向き合う時間になればと存じます。老いと病に立ち向かう「医のころ」を共有する多職種・多分野の専門家が集結し、「氷河のように山をも削る膨大なエネルギー」となり、今後の発展に繋がる大会となることを切に願っております。

福岡での開催は7年ぶりとなります。皆さまのご来福を心よりお待ちしております。

(注) 「メルスモン」1959年薬価収載。保険適用疾患「更年期障害、乳汁分泌不全」
「ラエンネック」1974年薬価収載。保険適用疾患「慢性肝疾患における肝機能の改善」